

幸いなことに、直孫 森三樹太氏が音更町字下牧に在住のことも迎りたどって求められ、標柱設置のご快諾を得たことも喜びであった。

以上紙面の都合により委しい内容は割愛させて頂きましたが、冒頭にも述べたように、この5件の標柱にかかわる史跡の調査と設置に当り、接触をもちご協力賜わった多くの方々のご厚情に、心から感謝申し上げますと共に、今後ともご指導ご支援を下さいますことをお願い申し上げ終らせて頂きます。



十勝川渡船場跡 標柱

石切山と、関 新太郎

昭和61年6月 取材 野呂己之松

はじめに

日本八景のひとつと云われる狩勝峠を山裾に持つ、標高1,090mの佐幌岳中腹に開かれた、通称、石切山、新太郎の石切山を語る場合、そのなされた事業を語ることが一番早道であろうとおもう。

事業の始め

明治37年頃、旧狩勝官設鉄道工事の進捗と共にトンネル入口、そのよう壁等に使用する石材を供給する必要から、明治39年頃より佐幌岳中腹に花崗岩の大塊露出するを発見する。これが新太郎の石切山の発祥となるのである。はじめは、ここより産出する石材を官設鉄道工事関係に使用された。旧新内駅ホーム及建造物礎石、鉄橋の護岸、新得機関庫車庫の一部など。これと併行するように、佐幌川護岸（現在の佐幌へ通ずる新得橋から鶴谷鉄工場裏の間）。新得市街地区、現本通り、佐藤商店附近一帯の土地段差による土留めのヨウ壁、新得神社境内に在る忠魂碑、手水鉢、コマイヌ、森本宮司記念碑、新得寺祖師万丈和尚記念碑、山ノ内要君記念碑、旧新得小学校々門柱（太田勇太郎氏寄贈13尺もの）戦後の新得小学校門柱、新内小学校門柱、ちょっと目に留まるものでも大きな物はこのように多く見られる。北海道庁指定土建業者となる。

新太郎の石山を全道的に一躍有名にしたのは、釧路の名橋、幣舞橋の建造であったろう。現在では、ご承知の如く、北海道の三大名橋であり、釧路市の観光の一つともなっている

幣舞橋。この事業には男一代の大勝負で落札し、石材準備に1ケ年をかけ、山には常時50名を超える労働者が稼いでいたと伝えられている。

架橋のために橋脚部の基礎を固めるのに最も苦心しながら、3ケ年の日数がかかった。昭和3年11月完成。内外の名士参列して幣舞橋落成祝賀式の席で、関新太郎は思わず落涙する。これほどの難工事でもあったのである。

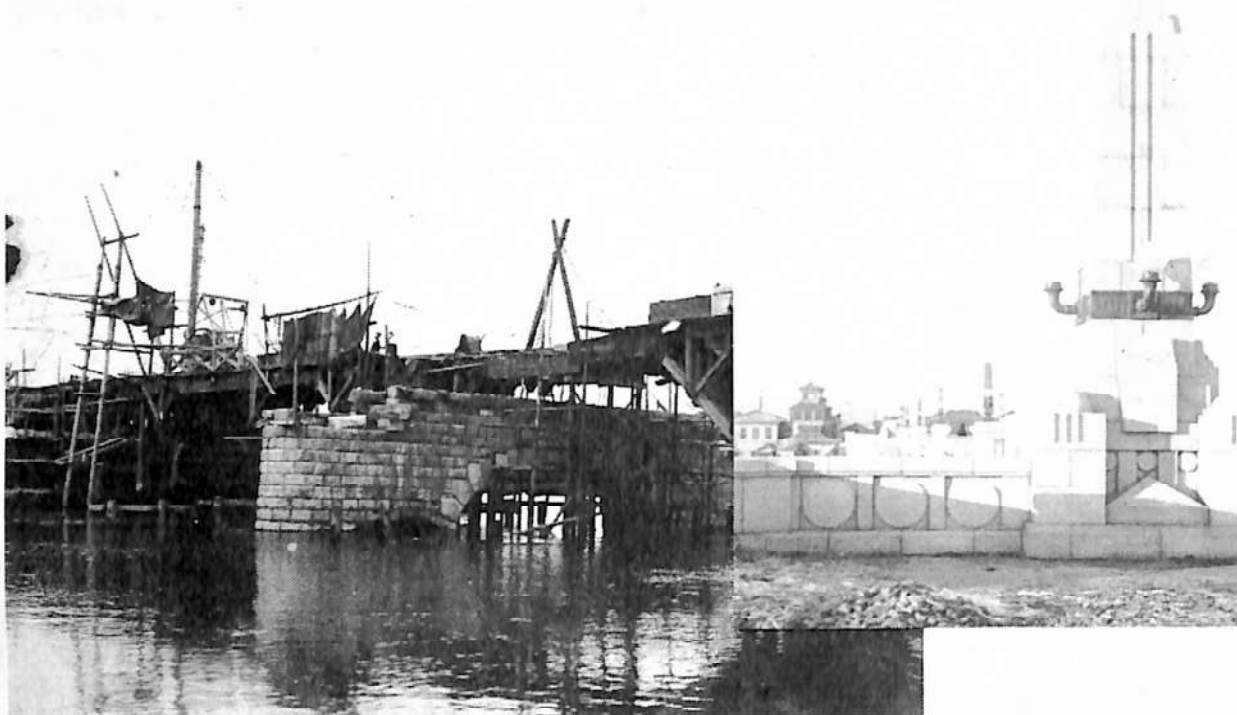
近年、橋上は架け替えられたが、橋脚部分はそのまゝ使用。橋名碑は現在もそのまま残っている。続いて札幌市、旧電車通り道路の石畳、小樽市の運河沿い石畳。特に小樽の石畳は工事終了後数年にして、新太郎の石山の石材は、他の石材の道路面に比して磨滅の程度が明瞭に差が出て、石質の優秀さが証明されて大いに宣伝されたことであった。

戦前、道民の多くが、それぞれの思いを込めて渡った旭川市、旧七師団に通じる旭橋の建築、旭川護国神社境内の忠魂碑、同市常盤公園の記念碑、この頃に、旭川市七条通り右角に関石工店を設ける。専ら石材建築を行う。

旭橋の石材準備にも1ケ年を費やした。石切のため12月の佐幌おろしの風雪を防ぐために、萱で風除けを作り、タガネが滑って使えなくなるまで作業は続けたと云う。その後札幌の豊平川に架かる豊平橋建築。札幌、北海道神宮に第一鳥居を同市内の女性が、単独で寄進するための発注を受けた。これの作業には、特段の精進をして行われ、柱1本の長さ24尺(7.3m)の長尺。これを切り採るため10日、搬出には馬の登れる場所まで下げるのに「カグラサン」で巻き下ろし、馬3頭で駅土場まで、貨車積みに再び「カグラサン」でロープを二重巻きにし、シユラ「土櫃」を使い2～3日かかって行く。人と馬と



石切山全景



釧路市幣舞橋 架橋風景 昭和3年11月竣工

「カグラサン」で一本貨車積みするのに1ヶ月を要した。杉本正雄さんなどが作業していた。（注、日本の鳥居で1本24尺というのは3カ所とはない筈である。）

この鳥居は現在でも、北海道神宮表参道の第1鳥居として建っている。又、旧樺太庁発注による戦勝記念碑も18尺程の大きいものであった。

このように、北海道の三大名橋、著名な碑、護岸等、長尺物の産出では道内随一と謳われた、新太郎の石切山であった。

その人物像とは

関新太郎は、慶応2年、岩手県二戸郡示摩郡村仁左平村に、父忠人の長男として生れ、両親と共に農業に励んでいた。すすめる人があって、土木請負業、盛洋社の社員となる。体格は並すぐれて堂々とした風貌は生得のものであった。

明治29年、同社が請負った、室蘭港埋立て工事着手と共に渡道、更に夕張大川橋架橋工事担当し、技術を磨き、且つは認められる。その後、神居古潭トンネルに使用すべき石材採掘を音江村国見峠で行い、苦闘の末、同トンネル工事完成する。

明治33年、盛洋社北海道引き揚げに際し、北海道に残り堀内組に入り屈足村字新内に入る。旧狩勝官設鉄道工事には、国境に通路全くなく、生活に不便を感じ、荆を刈り、刈り分け路を拓く。これが国境道路の開鑿の開祖と云われる由縁である。

明治36年に未開地13戸分を入手して小作を招き、関農場を造り、開拓にも尽力する。現新内小学校附近、ゴルフ場先端地帯がそれに当る。

開拓者の増加と共に、来住者の子弟の教育にも力を注ぎ、独力で数百円を拠出して校舎

建設し、教員を招き、自宅に教員を下宿させるなどして教育にも尽力する。現在の旧新内小学校開校に多大な努力をした。その後各種の公職に推挙されて地方発展に寄与した。

新得村の三人の太郎。新得の三太郎（関新太郎、太田勇太郎、重田重太郎）と巷間では呼ばれた人物であり、事業成功者でもあった。

佐幌岳の石切山は、関新太郎により開かれ、北海道を代表する有名建築にその石材は残された名山でもある。そして新内開拓の元祖でもあった。現在の新内地域の状況を見るにつけ真に転た感慨の深くなるのはどうしたことだろう。

余 録

ある日、封書が一通届いた。裏を返して見れば内地から見知らぬ人名が記されており、表を見て驚いた。表書きに住所もなにもなく、ただ、北海道、関新太郎様行き、とのみ書かれているではないか。いかに昭和に入ったばかりとは云え、北海道だけで封書が届いたなんて現在までも、これが初めの終りと家族一同ビックリするやら感心するやら、現在でも知る人々の語り草になっている。

当時、石切山には、職人さん、その手助けになる人、運搬する馬方さん等々多くの労働者が常時30人～50人程出入していた。それで、一般に言う渡世人がしばしば訪ねて来る。彼等は、5～6日稼いではどこかへ風のように去ってゆく。仕事は出来るし良く働くのだが定着性なく、全くの風来坊でね。夢を追っているような感じであった。又変ったのは、自称、大阪船場の呉服問屋の一人息子と名乗るのが、二日稼いで、三日目には飯だけ食べて言うのに、「乞食のほうの実入りがあるから」と仕事を止める若者がいたり、飯の時刻に顔だけ見せて食べたらしのまゝどこかへ消えてゆく渡世人もいた。こんなのは少ないが、それでも時々は見られたね。もちろん、礼状などは一枚も届いたことはないね。

昭和7年には、旭川市の旭橋は着工しており、架橋建築は完成近くなっていた。完成には3年かかった。その後、上川神社を北海道招魂社と社格が昇格となり記念として、石碑を寄贈することになり、新太郎の石切山から棹石15尺を切り出し旭川駅で貨車より降ろして、師団通りをシュラ（土嚢）に15尺の棹石を乗せカグラサンで巻きながら、賑やかに作業中突然のように元気のよい若者数名に作業妨害される。あわや乱闘寸前の事があったりしながらも現地へ5日程で到着する。これが現在、旭川護国神社境内に安置されている記念碑である。

表には	北海道招魂社
寄贈者	関 新太郎
作業奉仕	新得在郷軍人分会

昭和10年6月4日 建立

釧路、幣舞橋建築は大変困難を極めたが、落成式、渡橋式に時の内務大臣・若槻礼次郎閣下が来て初渡橋で歩いてくれたことは、私共業者としては光栄なことと思っている。古いと云われるかもしれないが、つまりそれ程重要な橋であったのである。昭和3年11月のことであった。